opusdei.org

## 属人区長の書簡 (2009年7月)

オプス・デイの信者に向けての今月の手紙においてエチェバリーア司教は、司祭という恵みに感謝するよう励ます。 「司祭職とはイエスのみら変すること」だからです。

2009/07/09

愛する皆さん、イエスが私の娘たち と息子たちをお守りくださいますよ うに! 聖ホセマリアの祝日を祝ったばかり ですから、私の心と思いは創立者へ と向かい、しっかり集中して熱心に その取次ぎにより頼みたいと思いま す。その司祭としての姿と、1928年 10月2日に主が託されたことへの惜 しみない応えとを考察すると、聖な る司祭の働きの素晴らしさを改めて 思い知らされます。何と度々、司祭 は自分だけが救われることはない、 常に大勢の人と共に救霊に与るのだ と、言われていたことでしょう。で すから、私たちキリスト信者は、キ リストの奉仕者である司祭たちの聖 性のために、倦まず弛まず祈る必要 があるのです。それは、自分たちに 託された奉什職のために全面的に自 己を捧げ、その召し出しに忠実であ りつつ、膨大な数の人たちに天国へ の道を拓くためです。

去る6月19日、イエスの聖心の祭日 に教皇様によって開始された「司祭 年」の最初の日々に、このような考 えが私の脳裏を去来しました。教皇 様は説教でこうお話しになりました。「『私の愛に留まりなされるの愛に留まいうイ人のの (ヨハネ15,9参照)と全てのりた全てりれています。(いることりのわけに であれています。(いることのおけられています。もは、次の事を見かます。 の耳に響きはいるではるないである。 の耳に響きないではるのでである。 の耳に響きないでである。 の耳にできるといる。」 (i)

聖ヨハネ・マリア・ビアンネは、神に対するその絶大な愛と、人々の救いへの燃えるような熱意ゆえに、聖なる奉仕者の保護者であり模範です。司祭たちの聖性と、オプス里性と教区司教との関係をこの聖人に対する創立者の愛情を目にしました。これからの一年間、私

たちも皆、同じことをこの聖人に願いましょう。

『カトリック教会のカテキズム』 は、「司祭職とはイエスのみ心を愛 することです」[ii]と言うアルスの聖 なる司祭の言葉を取り入れていま す。ベネディクト十六世も最近この 言葉を引用されました。何と偉大な 真理を含んだ表現なのでしょう。教 皇様は次のように訴えられました。 「私たちの司祭職の賜が、このイエ スのみ心から直接流れ出ることを、 感動をもって思わずにいられるで しょうか。私たち司祭は、信者の共 通の司祭職に謙遜と権威をもって仕 えるために叙階されたということを 忘れられるでしょうか。私たちは、 教会と世界にとって不可欠な使命を 帯びています。この使命は、キリス トに忠実であること、ますますキリ ストと一致することを求めます。 [iii]

司祭職への召命は、人類に対する神 の非常に特別な賜です。それは、あ らゆる時代の、あらゆる場所の人々 を、主の贖いの実りに与らせるため の賜です。当然のことながら、創立 者もそのことを高く評価していまし た。「ホセマリア、司祭」という表 現を口にされたり記されたりする時 には、特別な響きを持っていまし た。「司祭職はこの世で最も偉大な ものです。そう言える理由は、毎日 イエスをこの世にもたらす奇跡を考 えるだけで十分でしょう。私たちは どれほど聖母を愛さなければならな いことでしょう、聖母に勝る方は神 のみ!聖母でさえ、fiat mihi secundum verbum tuum! 「お言葉 通りになりますように し (ルカ 1,33) の言葉によって、ただ一度だ け主をこの世にもたらされたので す」「iv]と創立者は言われました。

同時に、オプス・デイの特別な使命 によっても明らかなように、創立者

はキリスト信者の信徒としての召し 出しを限りなく尊重していました。 オプス・デイの小道、つまり「専門 職とキリスト者としての日々の務め を果たしつつ聖性を求める道 | [v]を この世にもたらすために、主はいた ずらに創立者を選ばれたのではな かったのです。前世紀の30年代、聖 性と使徒職への普遍的召命について ほとんど語られず知られていなかっ た時代に、聖ホセマリアは、司祭職 を通して関わった人々にキリスト信 としての召命の尊厳について明らか に示し、洗礼によってもたらされた 霊的宝を見い出すよう助けました。 そして、全てのキリスト信者は、男 性も女性も、キリストの唯一の司祭 職に参与しており、皆が〈司祭の 心〉を持っていること、それゆえ、 司祭と同じように皆が全力を尽くし て聖性を望み、全ての人を救うため の野心を育まなければならないと教 えたのです。

愛に夢中になっていた創立者は、常 に新鮮な響きで、この教えを繰り返 しておられました。それは最期の日 まで続きました。帰天当日、娘たち との集いで、改めてそれを強調され ました。「ここに来るたびに言って いることを繰り返します。皆さんは 司祭的な心を持っているのです。皆 さんの信徒の兄弟たちにも司祭的な 心があります。その司祭的な心で 人々を助けることができるし、助け なければなりません。そして主の恩 恵と、オプス・デイの司祭たちの職 位的司祭職とによって、私たちは実 り多い仕事をすることができるので す。| [vi]

聖ホセマリアは、その著作や様々なところでの信者たちとの集まりで、この教えを具体的な例をあげて説明し、共通の司祭職を実行するよう促しました。例えば、1970年にこのテーマに関する質問に答えてこう説明されました。「皆、キリストの司

第二バチカン公会議は、職位的司祭 職と信者の共通の司祭職との関連に ついてこう述べています。「段階に おいてだけでなく、本質において異 なるものであるが、相互に秩序づけ られていて、それぞれ独自の方法 で、キリストの唯一の司祭職に参与 している。職位的司祭は、自分が受 けた聖なる権能を持って司祭的な民 を育成し、治め、キリストの代理者 として聖体の犠牲を執り行い、それ を民全体の名において神に捧げる。 信者は、自分が持つ王的司祭職の力 によって、聖体の奉献に参加し、ま た諸秘跡を受けること、祈り、感 謝、聖なる生活による証明、自己放 棄、行動的な愛をもって、この王的 司祭職を行使する。| [viii]

司祭に固有で特別な仕事とは、自己 の奉仕職によって信者に仕えるこ と。すなわち、洗礼によって受けた 共通の司祭職を信者が実行できるよ うに助けることです。それゆえ、キ リストの奉仕者である司祭は、かく も偉大な受けた賜に全力を尽くして 応えることが必要です。ここに、始 まったばかりの「司祭年」は位置付 けられるのです。

聖性と使徒職への召命が、単なる言 葉だけで終わることなく、信徒の生 活に奥深く染みこむためには、司祭 の任務が不可欠です。司祭だけが神 のみことばを聖なる権威をもって宣 言する教師です。ただ司祭だけが、 ゆるしの秘跡において神からの赦し を与え、良き牧者として人々を永遠 の命への道に導くことができます。 司祭だけがミサ聖祭においてキリス トの御体と御血を聖別する権能を与 えられています。司祭は聖変化を行 うごとに、人々が過ぎ越しの神秘に 直接、個人的に与って、その紹自然 的な歩みを活気あるものとするため に不可欠な聖体を拝領することを可 能にするのです。

これらのことは、私たちが、司祭の 奉仕職への忠実ために祈るよう働き かける動機となります。司祭たちは 自分に相応しい民を与えられ、信者 もまた自分たちに相応しい司祭を与 えられると言われます。ですから毎 日、司祭のため、そして信者のた め、本当の聖徒の交わりにおいて祈 るべきです。私たちは、ラテン・ア メリカでよく言われている「主よ、 聖なる司祭をお与え下さい」という 祈りを、日々、聖性の戦いに励むこ とによって、主に願わなければなり ません。この祈りは、常に適切で時 宜にかなったものです。司祭の聖性 を嘆願することで、私たち皆に良い 影響がもたらされるという確信を もって祈るのです。このことは、皆 が毎日果たさなければならないこと です。毎日このように祈っているで しょうか。皆がこの祈りに一致する よう、他の人たちに働きかけていま すか。

聖ホセマリアはこの務めを何と愛を 込めて実行していたことでしょう。 耳を傾ける人々を前進させようと、 その言葉には説得力があると同時に 切迫感に満ちていましたが、それは いつも聖徒の交わりへの信仰に動か されていたからです。「私は、悪い 司祭を知りません」と言っておられ ました。「弱く、熱心さに欠けてい て、多分、臆病な司祭ならいるかも しれません。しかし、悪い司祭など いるはずはないのです。| [ix] 他の ときにはこう言われていました。 「もしかしたら、皆さんが十分に彼 らを助けていないからではありませ んか。司祭のために祈っています か。ノアの良い息子たちのように振 る舞うべきだと分かっていますか。 (…)もう少し同情し、愛徳を実行 しなさい。陰口を言ってはなりませ ん。許し、理解し、祈りなさい。|

[x]

娘たち、息子たちよ。教会のため、 そして司祭と神の民の聖性のため に、信頼と楽観主義に満ちた祈りを 天に届けましょう。あらゆる国で、 キリストを探し、キリストと親しく 交わり、キリストを心から愛する人 が増えるように主に願いましょう。 主が「収穫は多いが、働き手が少な い。だから、収穫のために働き手を 送ってくださるように、収穫の主に 願いなさい | [xi]と仰せになったこ とは、いつの時代にも当てはまるこ とです。創立者はこのことを繰り返 し繰り返し強調しました。1964年 に、ある説教で次のように話されま した。「息子たちよ、この世にある **真理への飢えについて考える時、光** を持たない多くの気高い心の人々に ついて考える時、私や皆さんの弱さ について考える時、私たちには主の 光で照らし出されなければならない 多くの点があることについて考える 時、また命を与え実りを収穫するた めに、キリストの福音を伝え広める

必要を感じる時、そのような時に、キリストが人々の救霊を渇望してパレスティナを巡られたことを思い起こしましょう。それは度々黙想してきたことです(…)。

『そのころ、ある安息日にイエスは 麦畑を通られた。弟子たちは空腹に なったので、麦の穂を摘んで食べめ めた。(マタイ12,1)。彼らも今の 私たちのように、歩きながら空腹を 満たそうと手にした麦の穂の殻を取 り除いて口にしつつ、福音を広める ことが必要だと考えていたのです。

Messis quidem multa. 収穫は多かったのです。あの時の群集も、そして後に続く人々の群れも大勢なのです。 Messis quidem multa, operarii autem pauci. (マタイ9,37) 収穫は多いが働き手は少ない。私は、このことをあなた方に度々、表現を変えて話したのではありませんか。

(…) 主に願わなければなりませ

ん。Rogate ergo Dominum messis ut mittat operarios in messem suam (マタイ9,38) 収穫の主に、収 穫のために働き手を送ってくださる ように願いなさい。」[xii]

子供たちよ、caritas Christi urget nos [xiii]キリストの愛が私たちを駆 り立てています。聖ホセマリアのよ うに、私たちも聖パウロのこの考え を自分の奥深くに置かなければなり ません。全ての恩恵の与え主であら れる全能の神が、私たち一人ひとり の虜になっておられるのです。この 偉大な恩恵に心からの愛を込めて応 えましょう。神の招きは常に新し く、非常に素晴らしいことを納得し て、この愛を日毎に深め、そして、 誠実に間断なく、聖書のecce ego, quia vocasti me [xiv] お呼びになり ましたから、私はここにおります、 という言葉が私たちの生活で実現さ れることを渇望しつつ応えなければ なりません。キリスト信者であるこ

と、神の子であることとは、このような恩恵と真理を持っているのであり、物惜しみしない心を限りない私ためられることです。そうです、私たちは創立者が『道』に記した「私たちと共に愛なる御者のあとについてちたうではないか」[xv]という呼びかけに応えるよう、全ての人を励まさなければならないのです。

他方、神は、多くの家庭の両親、若 者や年配の人たち、あらゆる状況の 人たちが、洗礼によってもたらされ た聖性と使徒職への召し出しに真面 目に向き合うようにするため、多く の聖なる司祭を必要としておられま す。このことを教皇様はこう説明し ておられます。「『収穫の主に願い なさい』とは、私たちが召し出しを 〈造り出す〉ことなどできないとい うことでもあるのです。神からいた だかなければならないのです。私た ちは、人を集めるのに、会社などが 宣伝文句を周到に準備し、相応しい

戦略を考えるような形ですることはできません。神の御心から出る召命は、人々の心に届く小道と常に出会わなければなりません。

その上、それが人々の心にまっすぐ に届くためには、私たちの協力も必 要なのです。確かに、収穫の主にそ れをお願いするとは、何よりもこの 意向で祈ることを意味します。つま り、主がみ心を動かしてくださるよ うに、次のように申し上げることな のです。『どうかそうしてくださ い。人々を目覚めさせてください。 彼らのうちに、福音書に基づく熱情 と喜びを燃え立たせてください。こ れが何よりも価値ある宝であるこ と、それを見つけ出した人はそれを 伝えなければならないことを理解さ せてください』と。| [xvi]

創立者が救霊の熱意のため憔悴して おられたことを何度も目にしまし た。それまでされたことは全てほん の僅かなことだと思い、神の栄光と 人々に仕えることに不足がないよう に、常に先へ先へと進んでおられま した。私たちもこのように振る舞っ ているでしょうか。毎日、神への愛 を新たにしているでしょうか。振る 舞い方で神への愛を表しているで しょうか。

今月、ドイツとプエルトリコ、そしてメキシコを訪れることにしています。創立者が1970年メキシコを訪れた時、私たち皆がしたように、今度は私の意向によく一致して、グアダルーペの聖母のみ前で捧げるつもりにしている私の祈りに同伴してください。

来る7日には、ドン・アルバロが表明された「ここにおります」を思い起こし、それを日々新たにしましょう。私たちのためにゆるぎない忠実をかち得てくださるよう、その取次ぎによりたのみましょう。

心からの愛を込めて祝福を送りま す。

皆さんのパドレ

†ハビエル

パンプローナ、2009年7月1日

[i] ベネディクト十六世、2009年6月 19日「司祭年」開幕の説教

[ii] 『カトリック教会のカテキズム』1589参照

[iii] ベネディクト十六世、2009年6 月19日「司祭年| 開幕の説教

<u>[iv]</u> 聖ホセマリア、1956年8月8日手 紙17

[v] 聖ホセマリアへの祈り

[vi] 聖ホセマリア、1975年6月26日 団欒のメモ [vii] 聖ホセマリア、1970年5月21日 団欒のメモ

[viii] 第二バチカン公会議『教会憲章』10

[ix] 聖ホセマリア、1972年11月19日 団欒のメモ

[x] 聖ホセマリア、1972年10月29日 団欒のメモ

[xi] マタイ 9,37-38.

[xii] 聖ホセマリア、1964年3月26日説教のメモ

[xiii] 2コリント5,14.

[xiv] 1サムエル3,6.

[xv] 聖ホセマリア、『道』790

[xvi] ベネディクト十六世、2006年9 月14日フライジングでの講演 pdf | から自動的に生成されるドキュメント https://opusdei.org/ja-jp/article/shuren-qu-chang-noshujian-2009nian-7yue/ (2025/12/11)